
隣町のヒーロー

ちまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のヒーロー

【コード】

N2152P

【作者名】

ちまき

【あらすじ】

ああ、なんてことだろう、こんなところから俺の描いてきた平和と日常の理想がくずれはじめるとは・・・

一日一善

都内某所、都内と言っても都心からだいぶ外れたここは都会にあこがれやって来た連中から見たら

「東京つて割に俺のいたこと大して変わんないね」
とでも言いたくなるくらい、田舎でもなく都会でもないそんなあいまいなところ。

コスプレで出歩く人もいなければ買い物先で有名人と出会うわけもない
ニュースになるような事件もなければスクランブル交差点だってない
そんな外れの街。

ただこの街には都会のせわしなさもなければ事件を起こすような頭のイカれたやつもない。
都会にはない落ち着きと平和があった。そんなこの街が俺はどこか
気に入っていた。

今日の俺はそんな平凡な街から電車でお隣の平凡な街へ
買い物にでかけ無事買い物を終え、家に帰る道中であった。

ただ、この日、こんな近く街にも個性溢れる人がいたのだと
俺は知ることとなった。

「っおい！！！ジュース一本買う金よこせって言ってるだけだろ！
」！

「す、すいませんっ！」

「すみませんじゃねえんだよ！120円貸してくれって言ってんだよっ！」

「すみません！ゆるしてください！」

「わかったから、120円貸してくれたらゆるしてやるから、ほら、よこせよ」

そういえば今朝ニュース番組の占いで『予想外の事態に出くわす！？』とか言っていたな。

あれって番組ごとに違っし、適当にやってんのかと思ってたけどちやんと番組ごとに占い師いるって知ってた？

「すみませんすみません！！このとおりですから！！！」

「このとおりじゃねえよ！！どのとおりだよ！！金出せって言うてんだよ！！！！！」

俺はそのまましく予想外の事態に出くわしている

全身赤色で顔はフルフェイスのヘルメットにV字の目がついていて
・
・
プーマのロゴが入ったジャージに白い無地のTシャツで首もとからのぞく肌は
変身したヒーローのユニホームを思わせるゴムっぽい質感の赤色。
そう、まるでその男は”ヒーロー”のまましくそれだった。(服装を除いて)

「勘弁してください！ボクには嫁も子供もいるんです！！！」

「嫁も子供も関係ねえだろうが！今関係あんのは100円玉一枚と二枚の10円玉なの！！」

俗に言う”レッド”は眼鏡のサラリーマンからカツアゲしていた。

さっきから見ているのだがどうやら缶ジュースを買いたいらしいのだが

財布を持ち合わせていないらしく、通りかかったサラリーマンに

『ジュース買いたいが金を持っていないので、120円貸せ』と脅しかけているようだ。

「ほんとにすいません！！もうしませんから！！！！」

「しませんじゃねえんだって！何しないっつうんだよ！？俺は金出せって言っただよ！」

120円出せば済むものを何故かテンパったサラリーマンはただ平謝りするだけで一向に金を出さないので余計に”レッド”は怒っているようだ。

他の通行人は皆、見て見ぬふりをして過ぎて行く

よく言われる都会の人は冷たいってのはこういうことなのだろうな。

・・・俺が助けるよりほかにあるまい。

「……………あの、どうかしたんですか？」

せめて俺くらいは温かい心の持ち主でいよう

そんな感情から出た言葉と行動だった。

「ああ！よかった！たたた、助けてください！！！！！」

俺の足もとにすり寄って来たサラリーマンは涙ながらに両手を合わせ神様仏様と言わんばかりに命乞いをしてきた

が、

「つてめ！何が助けてだよ！俺が脅してるみてえなこと言いやがって！」

胸ぐらを”レッド”に掴まれ、
両足が空を掻くほど高く持ち上げられてしまった

こんな状況でありながらも俺は”レッド”の背の高さに気づいた。
多分この男、優に180センチは超えているにちがいない
もしかしたら190以上あるかも・・・

「お困りのようでしたら、俺も協力しますから降りしてあげてください」

すると”レッド”はこちらに顔を向け一言言った
口は見当たらないが彼の声はあのマスクの下から聞こえているのだ
るうか？

「あ？そうか！！いやあわるいね〜」

「た・・・助かった・・・」

サラリーマンは地面に下ろされて胸ぐらを放されると同時にセカン

ドバックを抱えて走って行き
曲がり角のあたりで俺に深く一礼して全力で逃げて行った

「で、何に困っていたんですか？」

「いやあそれがよ、内田にファンタ買って来てくれって言われたんだけど財布忘れちゃってよ」

「お金がないと」

「そそ！」

そもそもこれは”変身”している状態なのだろうか
もしそうであるとしたら”変身”を解いたときどんな男が出てくる
のだろうか

「いくらいるんですか？」

「120円でいいです」

「どうぞ」

「ありがとうございます！」

思えばこれが俺と彼の最初の出会いだった。

ただこの出会いが俺の人生を善と悪のどちらに影響したのかは
今だにわからない。

いや、考えるまでもなく悪か。

ただ事態が悪く転び始めたのはこのとき俺が
家に帰る分の電車の切符代を一部失ってしまったからであるとい
うのは
永遠不変の事実だろう。

このときの俺はこの事実を彼に伝えることしかできなかった、
何カ月後の俺がこの場にいたなら、歩いてコンビニでも探しに行
って

そのATMから金をおろせと声を荒げているだろう。
そしておろした札で缶コーヒーでもかって小銭にくずせと。

「・・・そうか、悪かったな」

「いえ、俺が好意で出したお金ですから」

彼もやはり”ヒーロー”のはしくれなのだろう

この一言が俺が初めて見る彼の”ヒーロー”の部分から出る優しさ
だった

「・・・まあ、なんだ・・・オレんち来るか？切符代くらい出す
ぜ」

「・・・お願いします」

二人の意見がまとまった後もはしばらくその場から
動き出すことができずにいたのは

”神様”が『そつちじゃない、お前が進むべきはそつちじゃない』
とばかりに

与えてくれた引き返すチャンスだったのかもしれない。

俺たちは自販機を背に歩き出した、

夕日と重なった”レッド”の背中は逆光で黒く見えた

「オレ、大森って言うんだ、よろしく」

「あ、俺は五十嵐って言います、一応新聞記者です」

「へー！記者さんだったのか！」

「たいした記事を拾ったことはないですけど。大森さんは何をしたらっしゃるんですか？」

「オレ？オレはな。『ヒーロー』ってとこかな」

俺は俺の不運を呪った

そっいえば今朝のあの占いは12位だったな

「オレたち、なんか長い付き合いになるような気がするわ」

もうひとつ角を曲がり逆光になっていた夕日が

彼の背中にあたったとき俺は初めて彼のTシャツが無地でなかったことを知った

「『一日一善』……」

「あ？なんか言ったか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152p/>

隣町のヒーロー

2010年11月29日23時36分発行